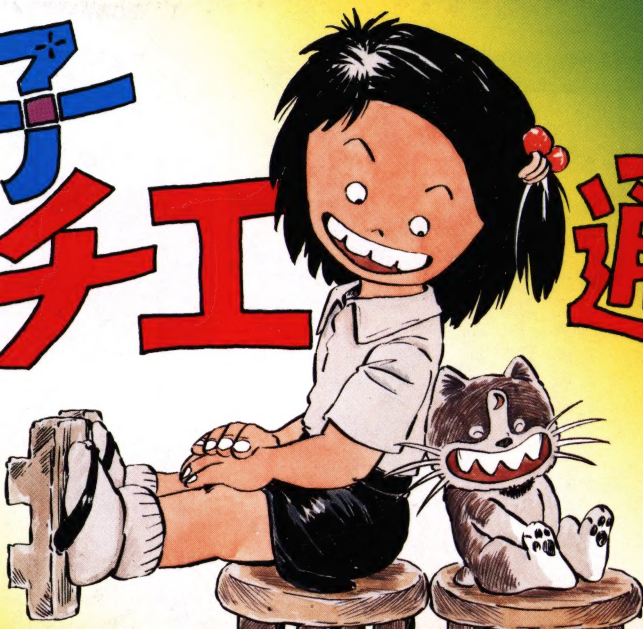
じゃりン子チエ通信

大屋政子の『チエ』奮戦記
（胆っ玉レディー）

はるき悦巳『オレと下町』

徳洲会・徳田虎雄
『チエって何じゃ？』

井上ひさし文芸時評をめぐって

創刊
第1号

目次

『じゃりン子チエ通信』創刊にあたって――

『じゃりン子チエ通信』という小さな雑誌、これはいったい何の雑誌なのだろう？という疑問にまず答えなければならないような気がします。どんな雑誌にもその刊行の目的なり趣旨があるはずだからです。

『じゃりン子チエ』は周知のように、はるき悦巳さんの漫画作品です。その質の高さは、井上ひさしさんをして「見晴らしのいい叙事詩」「近来、出色の通俗・大衆・娯楽・滑稽小説のひとつ」と言わしめたほどで、人生経験の豊富な大人が読んでも、充分に楽しむに堪えるものです。それが多様な職業・年齢層にわたって愛読されている所以でもあります。

こういうことは漫画・劇画が量的には氾濫している昨今の社会においても珍しいことではないか？ そう考えました。ではその人気の原因を追求してみよう、いやむしろ各人の思い入れや楽しみ方を追ってみよう、そこから一つの社会的な意義も（大げさかもしれないが）引き出せるかもしれない、とも。

とにかく作品自体に限定せず、その内包する様々な要素やテーマを多面的にとりあげ、楽しみながら、自由に発言できるミニ情報誌があってもいいのではないか、そういう考えでこの雑誌を発刊しました。

一つの漫画作品という小石を池に投じて、そこからどれくらい大きな波紋を描き出せるか、という意味での新しい試みかもしれません。

はるき悦巳インタビュー（第一回）

オレと下町

『じゃりン子チエ』の生みの親はるき悦巳さんに、下町のこと、小鉄みたいな猫のことなど、ナマの声を聞いてみた。

――**『じゃりン子チエ』**の舞台になっている大阪での経験などについてお伺いしたいんですが。あれは通天閣界隈ですか？

はるき　そうですよね。あのへん。

――最近大阪へいらっしゃいました？

はるき　全然帰ってないんよ。帰りたいですけどね。

――『**チエ**』の舞台となっている下町の感じはいつ頃のものですか？　年代は。

はるき　僕はね、生まれてから中一までおったんやけどその頃の感じで描いてるんですよ。そやから、だいぶ前やね。

――そうすると今から十七八年前……

はるき　十三か、そのへんに引っ越してるから……

――二十年近く。

はるき　そうですね、二十年近く前。そやから今の感じで受けとんのがわからへんけどね。全くあの辺の感じで描いてる。

下町の共通点

はるき　で、ちょうどAさんがここにおるから言うんやないけど、下町の話で浅草描いたんですよね。浅草の話やった。それが終って、あれで描けるんやないかと思たんですよ。ああいうとこやったらね。下町は描いてみて描きよかった。

――やっぱり大阪の下町と共通点がありますか？

はるき　浅草行った時は僕は正直いって感激しましたよ。俺、長いこと東京におったけど、行ったことなかったですよ。で、Aさんでやるいうのがあって取材に行ったんですよ。カメラ買うて。

Aさん　あれ、そのために買ったの？

はるき　そう。

Aさん　前からあるようなこと言ってたじゃない。(笑)

はるき　違う違う。取材で買うたんですよ。

Aさん　えらい投資してるわけだね。

はるき　そうそう。あの漫画

はるき悦巳氏

には金かかってるんですよ。一番金かかってる漫画です。（笑）

――それ、何という作品ですか？

はるき　『舌町物語』いうてね、『じゃりン子チエ』の前に描いた漫画です。それでね、あれは不思議だな、隅田川なんてあのあたり歩いたら何ともなつかしい感じがするんですよ。全然知らんでしょ、あんなとこ。で、風景は違うことは違うんやけど、浅草いうとこと心斎橋は似てるとこがある。映画街でも新世界でも、何か……。この間も、もう一ぺん浅草行ったけど、その時もええ感じやったなあ。僕なんか安心して歩けるんですよね。駅おりてから、地顔で歩ける。もう大丈夫やいう感じ。

Aさん　住んでいる所が上等すぎるんだよね、豪徳寺なんてさ。

はるき　俺はここ関係ないから。しょうもないとこや。

ネコも住みづらい!?

――大阪の『チエ』ファンの中には大阪ネコと東京ネコは違うんや、なんて意見もあるんですが。

はるき　いや一緒でしょ。僕は大阪の時も飼うてるし、東京でも飼うてるけど。近所がうるさがってるのも一緒やからね。大阪のネコも近所の評判悪かったですね。今のうちのネコも非難をあびてるんですよ。そやから今みたいな状態なったらむつかしいですよね、もの飼うたりするの。そんで俺らなんて野良ネコ入って来たん飼うてるから、本来野良の習性やからウロウロするでしょ、近所。あんまり評判ようないですね。

――苦情がくるんですか？

はるき　生き物でしょう、それゆう人の方がおかしい思いますけどね、ブロックの上歩いとった、いうて。そらしょうがないもんね。ブロックぐらい歩くもんね。あんなん言われたら悩んでしまうもんね、俺。ネコ嫌いな人なんですね。

――そういう過敏な人が増えているのも事実ですね。

はるき　そやから、貧乏やったら貧乏、金持ちやったら金持ちでええんやけど、その間（中間）が増えてきてるでしょう。ああいうのは良くないんやないかね。守りにまわってしまうから。やっとね、ない金でやっと家買うてしまうから、これはもう俺のもんやいう感じになってしまうから。いかんのやないかなあ――。

（次回は、マサルの父親の職業は？　チエは何歳まで成長するか？　など未公開の作者腹案を大公開する見逃せないインタビュー！）

井上ひさしの文芸時評をめぐって①

不マジメ半分講座

椎枝　圭

ほんとに朝日新聞って偉大だよね。それとも井上ひさしさんが偉大なのかな。

なにしろ井上ひさし（以下敬・称・略）が朝日（以下新聞も略）の文芸時評で『じゃりン子チエ』をベタぼめして以来大岡昇平みたいな大家までが「ぎっくり腰になりあるを自覚」しつつ読んでるっていうんだから、漫画も市民権を得たというか、いいオトナが堂堂と読んで発言しても恥ずかしくなくなったというわけで、まずはご同慶のいたりだね。

ところで朝日の文芸時評を読んでない人のために要点をかいつまんで説明してあげよう。話はそれからだね。

あれは何を隠そう昨年一九八〇年五月二十五日、朝日の文芸時評欄での出来事だったのである。と、ケーハクな言葉づかいから、やや荘重な言いまわしに変ったりなんかしてもナカミは同じなんだからよそうね。（以下、非礼をも省みず講釈。）

井上ひさしは自らを「通俗・大衆・娯楽・滑稽小説の、あまり頼りにならぬ書き手である」と、まず規定したわけ。そいでもって、締め切りに追われつつ（とは書いてないけどオソラクそうだろな）時評の対象たりうるネタ捜しのためにあっちゃこっちゃ本をあさっておったんよ。ところがロクな本がない。ほんと、こういう時は同情を禁じえないもんなんだよね。（このへんの情況説明はヒジョーに恣意的ちゅうか独断的なので、さらっと読み流してちょうだい。）

ところが、あった！　一冊いいのがめっかった！　こういう時ってキンキジャクヤクっつーか嬉しくて涙ぐんじゃったりなんかして、ヒザのあたりからジワーッと快感がこみあげてきたりするわけよ。

その本というのが篠田一士の『日本の現代小説』だったわけ。うん、いい本だよ。

そこで井上ひさしはこの本の分析と主張をタクミに援用しながら、はるき悦巳の『じゃりン子チエ』に近づいていく。オトナっちゅうのは大義名分がないとコドモ（もしくはコドモの心を忘れたくないオトナ）の領域へ入りづらいというヤヤコシイ一種のタブーに縛られとるんだよね。

しかし井上ひさしは勇気をもってここを突破した。エライ！　やっぱり朝日じゃなくて井上が偉かったんだよね。

さて、話は全然進んどらんので、次号を待て。（つづく）

徳洲会理事長
徳田虎雄「チエって何じゃ？」

医療法人・徳洲会の名はご存じの方も多いだろう。「年中無休・24時間オープン」で患者のための医療の確立を志す病院だ。昭和48年、当時無一文に近かった徳田医師が自分の生命保険を担保に80ベッドの病院を開いて以来、この8年間でなんとその45倍の3千650ベッド（9病院合計）を次々とオープンし、医療後進地区で庶民本位の低医療費を実行しながら目標に向かって戦い続けている。

徳之島の貧農の長男として育った現・徳田理事長は、理想の医療社会を目指して、今でも毎日16時間働きづめだという。毎日の自分の働きぶりを本部の身近な職員に評価させて、手帳に○△×のいずれかを記入する。負けず嫌いの徳田理事長は必ず○になるよう努力しているそうだ。

「三日坊主でもいいから、この方法をやってごらん。」

とにかくエネルギッシュな人だ。

各地の病院経営や講演で東奔西走の毎日。日程表は超過密スケジュールでびっしり。漫画はおろか本を読む時間がそもそもない。

「じゃりン子チエ？　それ何ですか？　ああ漫画ですか。漫画など今まで読んだこともない。」

徳田理事長のように生活力が旺盛な女の子が主人公で、下町の庶民の哀歓をおもしろおかしく描いた漫画ですよ——と説明すると、日程表をのぞきながら、

「明日大和市へ行く電車の中で読めるかな……とにかく読んでみましょう。」

理事長の身の回りにある手帳やノートには全てこう書いてある。『生か死か!!真実を求めて。愛。努力。忍耐。全力投球。』

「愛とは相手の立場に立つこと。努力とはお産をするほどの苦しみを伴うもの。努は女が又に力をいれると書くでしょう。」——ひとつ努力して読んでみて下さい。

“胆っ玉レディー” 大屋政子の『じゃりン子チエ』奮戦記

「うちのおとうちゃんがねェ」で有名な大屋政子さん（故大屋晋三「帝人」社長の奥さん）が『じゃりン子チエ』の舞台に登場した。小野種紀さんの脚本・演出でガッツ石松（テツ役）東緑（チエ役）などとの共演。年齢より遥かに若い母親役に挑戦し、大奮闘。

大阪「笑の会」(藤本義一村長）が若手の漫才家、落語家を起用して舞台化したのに続いて、東京では「銀座みゆき館劇場」が公募の出演者を中心に上演。中でも異色だったのがチエの母親ヨシ江役の大屋政子さん。

もちろん大屋さんは公募ではなく演出の小野さんが執念で口説き落としたいわば特別出演だ。ビジネスにテレビ出演にと超多忙な大屋さんが舞台に立ったのは1月24日25日の両日だけ。24日の初芝居の直後、舞台化粧もそのままの大屋さんをつかまえて感想を聞いてみると、

「イヤー、もう心臓に動悸が出そうやわあ」を連発。

歌のステージには子供の頃から何百何千回と立ったことはあるがお芝居は初めて、という大屋さん、『チエ』の舞台稽古には一回きりしか参加できなかったとあって、緊張の連続だったようだ。

原作の漫画でのチエの母親ヨシ江は、下町のガラの悪い言葉づかいの登場人物達に対して、しとやかで丁寧な言葉づかいのやさしい女性。

「私のヨシ江役、どうでした？ どんな気ィした？ ぴったりゆう感じ？ おかしない？」

大屋さん、しきりに気になる様子。――ずいぶんやさしい上品な感じの母親でしたよと答えると、今度はそばに控えている室生ロイヤルカントリークラブの高橋総支配人に「総支配人、あんたはどう思た？」

大屋さんは同カントリークラブの理事長でもある。
　とにかく多忙の大屋さん、舞台稽古一回きりで、あとはどうしたのかというと、テープに相手役と自分のセリフを収録し、ビジネスの合い間をぬって車中や自宅で何百回となく聞いて練習したそうだ。
　そんな大屋さんを口説き落とした小野さんの話——。

「最初は断られました。それで大阪のご自宅までおしかけてお願いしたわけです。当初、チエのおバアさん役をと考えていたんですが、お会いして、あこれは母親役だと。」
　大屋さんもおかしそうに、
「私、お待たせしてた応接間へ入ったら、直立不動に起立しなはって、おみそれしました、と。あのセリフよう忘れんねん。」
　その夜、大屋さんは徹夜で原作の漫画と脚本を読んだそうだ。一人でゲラゲラ笑ったり、ポロポロ涙を流したり……漫画など読んだことがないという大屋さんも、
「こんなんなら出していただこうと決心しました。」
「うちのおとうちゃんが生きてたら、やっぱり私がいやじゃーいやじゃーゆうても出さして、毎日かぶりつきで見てますわ。」
　ついに出ました、おとうちゃん。大屋さん、最終日にはタイツ姿まで披露しての大サービスぶりだった。

第26回小学館漫画賞受賞決定!!

はるき悦巳さんが『じゃりン子チエ』で小学館漫画賞を受賞することが決定した。

この賞は昭和30年以来、毎年、最もすぐれた作品を発表した漫画作家に贈られるもので、今回は第26回目。

少年少女向けの第一部と青年一般向けの第二部があるがはるきさんは青年一般の部で受賞した。他に、第一部は高橋留美子さん(『うる星やつら』)、第二部は長谷川法世さん(『博多っ子純情』)が同時に受賞決定した。

審査委員には漫画界の大御所に混って、北杜夫さん、小松左京さんなどの小説家や荻昌弘さんのような映画評論家もいて、多彩な面々。

なお賞の贈呈式と祝賀パーティは三月三日午後四時から新橋第一ホテルで行なわれる予定。

みなさんからの「便り」やでェ!

私は「チエ党」

♥美容院に勤めて四年たちました。美容師の資格も取り、恋人もできて結婚を目前にひかえていますが、彼(もうすぐ夫になる彼)が実は『じゃりン子チエ』の大ファンで、特にテツが好きなのです。

私も彼の影響で単行本を読み、彼に負けないぐらいのファンになってしまいました。でも私はチエが好き。いわば「チエ党」。彼は「テツ党」。

しかも私が勤め先の美容院で同僚に『チエ』の本をすすめたら、一人を除いて皆ファンになり、特に気違いみたいな「小鉄党」が一人できました。あとの大半は「チエ党」で、「ヒラメ党」も一人います。

『じゃりン子チエ』の登場人物は皆それぞれ個性があって、私たちはまるで現実の人間のことのように話題にしています。

私は結婚しても当分勤めを続けるつもりですが、将来子供ができたら、子供にもぜひ読ませたいと思っています。

末長く続けて下さい。

(東京　高橋照美　24歳)

大阪はわが誇り

♥私は子供の頃から、大阪に住んでいることにいわれのない劣等感を持っていました。

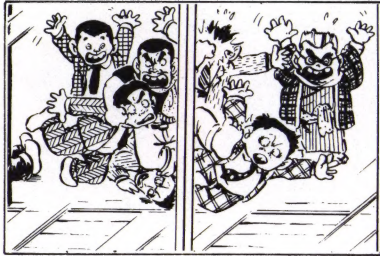
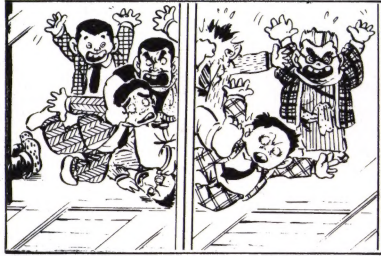
ところが一年前たまたま読んだ『じゃりン子チエ』のおかげで、その劣等感が嘘のように消しとんでしまいました。

大阪弁や大阪の人情のよさを痛いほど思い知らされたからです。ごっつう嬉しかったわ(と急に大阪弁になる)。ほんまに今までの自分がアホに思えてん。今では大阪はウチの誇りや。チエちゃん、感謝!

(大阪　匿名希望　19歳)

上の右の絵に比べて、左の絵には**マチガイ**が5ヵ所あります。正解の方の中から抽選で10名様に「小鉄人形」をプレゼントいたします。

●応募要領

ハガキに「チエ通信1号クイズ」と明記した上で、答えを言葉で書き、自分の住所・氏名・年齢・職業を書き添えて、㈱キティ・エンタープライズ「チエ係」へ送って下さい。

あなたの原稿募集中です!!

編集室より

本誌では『じゃりン子チエ』に関する感想や批評、あるいはこの漫画にまつわる面白い話や情報（例えばチエやテツにそっくりな人物・小鉄みたいなネコの話など）を読者の皆様から募集しています。掲載された方には薄謝進呈。

また定期購読希望の方は本誌5回分500円＋郵送料300円を現金書留で左記へ。

〒150 東京都渋谷区渋谷1の14の11小林ビル㈱キティ・エンタープライズ「チエ係」

じゃリン子チエ通信
2月15日号
編集人 池田栄志
発行人 井上堯男
発行所 (株)キティ・エンタープライズ
〒150 東京都渋谷区渋谷1の14の11 小林ビル7F ☎03(499)4711
100円

高中正義 RAINBOW GOBLINS STORY

S:¥3,800 A:¥3,000 B:¥2,500 都内プレイガイドにて発売中 問合せ:スタッフ・ギャング(496)1306

3/10㊋・11㊌ 日本武道館 OPEN 5:30P.M.▶START 6:30P.M.

ニューアルバム
▼
虹伝説 THE RAINBOW GOBLINS
36MK9101～2/36CK9101(カセット)
特別価格 2枚組 ¥3,600
3月10日発売予定

主催＝キティ・エンタープライズ／提供＝Ⓟパイオニア株式会社／後援＝フジテレビ、ポリドールK.K.、キティ・レコード／協賛＝MAZDA、企画・制作＝SŌGŌ、スタッフ・ギャング、キティ・アーティスト